

岡山大学文学部紀要,
43, 1-22. (2005年)

批判的思考のための「血液型性格判断」

長谷川 芳 典

批判的思考のための「血液型性格判断」

長 谷 川 芳 典

本稿は、批判的思考(クリティカルシンキング)の観点から「血液型性格判断」の論点を捉え直し、多様な視点から人間行動を理解するための資料として活用することを目的とする。

1. これまでの「血液型」論議の概略

(1)血液型性格判断の変遷

ここでいう血液型性格判断^{*1}とは、人間をABO式血液型の4つのタイプに分けて性格や気質を特徴づけ、これをもって行動予測、適性、他者との相性などの違いを主張する学説・俗説の総称をいう。

血液型性格判断は、戦前の日本の医師たちや古川竹二の研究にそのルーツを求めることができる。大村(1998)によれば、最も古い文献は1916年に『医事新聞』に掲載された原来復・小林栄の「血液ノ類属的構造ニ就イテ」という論文であり、また、これとは独立した形で1927年には古川竹二が「血液型による気質の研究」という論文を『心理学研究』に掲載した。古川は1932年に『血液型と気質』という単行本を刊行している。現在の血液型ブームの直接のルーツは古川の説にあるとされている。戦後の血液型性格判断ブームは、1971年に刊行された『血液型でわかる相性』を初めとする能見正比古の一連の著作に依るところが大きいとされている^{*2}。その後、単行本、週刊誌、TV番組などを通じて「血液型性格判断」は1つの文化として定着し、いまや、総理大臣のプロフィールにまで堂々と血液型が記されるようになった^{*3}。

*1 「血液型・気質相関説」、「血液型性格分析」などとも言われるが、ここでは世間一般で最もよく使われていると思われる「血液型性格判断」という呼称を採用することにした。本文中では「血液型」と括弧付きで省略することもある。なおGoogleの検索(2005年4月11日朝現在)によれば、「血液型性格判断」という検索語では78300件、「血液型気質相関説」は4220件、「血液型性格分析」は39100件がヒットした。

*2 能見正比古の「血液型人間学」がオリジナルの研究であるのか、上記の古川学説のコピーであるのかについては議論があり、大村(1998)は、

現代の血液型人間学は、古川学説のコピーとして存在している。古川学説は、それ自体が持っていた矛盾撞着によって死んでしまったが、それを再生させ、しかも大衆好みのファッションをさせて権威に弱い人たちの前に引っ張り出した偽科学者がいる。能見正比古という人物である。彼がいなければ、現代のような血液型人間学の流行と定着はなかった。しかし、早口とカリスマ的な態度で大衆を欺瞞したことも事実である。能見の書いているものはコマースリズムに導かれた大衆的読物で、どうしてこのような非科学的読物が売れるのか、不思議である。と能見氏を批判している。

*3 2005年3月26日現在の首相官邸・小泉首相プロフィール <http://www.kantei.go.jp/jp/koizumiprofile/>では、生年月日、干支、星座、出身地、血液型、身長、体重、議員歴、ニックネームが紹介項目として挙げられている。

サトウタツヤ氏^{*4}の年表によれば、戦後の「カルチャー」として血液型ブームは次の4つの時期に区分することができる。

1970年頃から1981年頃：第1期 黎明期 カルチャーの産声あがる 血液型の超人・能見正比古の活躍

1982年から1994年頃：第2期 隆盛期 占い師の参入による多彩な展開と忍びよる批判

1985年から1986年頃：第3期 衰退・潜伏期 マスコミ、学者による批判の展開

1990年代以降：第4期 復活期 新しい理論化により大衆の常識として再生

(2)心理学の立場からの検討

さて、戦後の「血液型ブーム」に対しては、心理学の立場からも様々な検討や意見表明が行われるようになった。

1番目のアプローチは、実際にデータを集めて、血液型による顕著な違いがあるかどうかを検討するという試みである。

例えば能見(1977)に記されているように、「血液型」の書籍には「親分のO、リーダーA、親方のB、大黒柱AB」、あるいは「がめついO、コマかいA、ケチンボB、出し惜しみAB」というように、同じ「性格特性」を血液型別に言葉を変えて表現しているだけのように見受けられるものがある。ちゃんとした手続を経て構成された性格検査を用いれば、そのような曖昧さを解消することができるであろう。

そうしたなかで長谷川(1985, 1988)は、「心理学」の受講生や公開講座の受講生を対象にいくつかの性格テストを行い、「血液型」が異なっても性格類型や行動傾向に顕著な差は見られないことを報告した。

なお、ここで留意していただきたいのは、この種の調査データは、決して「血液型と性格は全く相関が無い」ということを実証するものではないという点である。そもそも、調査データで有意差が見られないということは、「相関が無い」ということの積極的な証明にはならない。この種の検討のロジックはあくまで

●血液型性格判断の喧伝者たちが言うほどに顕著な差があるというのであれば、どんなテスト、どんな行動観察を行っても明白な違いが見られるはずだ。

ということに対して、1つの反例を示すというレベルにとどまっている。

2番目のアプローチは、「血液型性格判断はなぜ当たっているかように見えるか」についての心理学的分析である。

大村(1990, 1994)は、FBI効果という呼称でその説明を試みている^{*5}。FBIとは、フリーサイズ(Freesize)のF、ラベリング(LaBeling)のB、インプリンティング(Imprinting)のIの頭文字(もしくは単語の途中の文字)をとって名付けたものであり、このうちのフリーサイズとは、どの血液型にもあてはまるような性格表現を血液型別にちりばめたために当たっていると錯覚する効果のことをいう。上述の「親分のO、リーダーA、親方のB、大黒柱AB」もこの効果を利用した表現であると言えることができるだろう。つまり、指導者にふさわしい人がたまたまO型であれば「親分のO」と言われ、たまたまA型であれば「リーダーA」と呼ばれるが、実際にはいずれもフリーサイズの性格表現であると言えることができる。また、ラベリング効果とは、いくつかの性格表現アイテムを束ねて、特定の血液型者へのラベルづけに行うことであり、インプリンティング効果とは、アヒルの刷り込み(インプリンティング)と同様、血液型別の特徴表現が刷り込まれることを言う。ラベリング効果やインプリンティング効果は、人種やジェンダーに関わる偏見やステレオタイプ形成と同根であると考えられる^{*6}。

「血液型性格判断はなぜ当たっているように見えるか」という2番目のアプローチに関してはもう1つ、

- ・標本の大きさを無視して比率だけを見る
- ・標本の偏り
- ・有意差が出た、都合のよいデータだけをつまみ食い

という統計上のトリックを挙げることができる(長谷川, 1994参照)。日本人の血液型の比率は、おおむね、A:O:B:AB=4:3:2:1であると言われているが、サンプルサイズが小さいと偶然の偏りが出やすくなる。いっぽう、歴代首相、五輪メダリスト、プロ野球の殿堂入り選手などは、該当者が少ない。そういう少数集団の中から偏りの大きいものだけを選び出して、偏りの原因が血液型別の適性に起因するかのようにこじつければ、いくらでも当たっているように見せかけることができる。

以上述べた2つのアプローチのほか、(1)社会現象あるいは1つのブームとして研究対象にするアプローチ(例えば、佐藤・渡邊, 1992, 1996)、(2)ステレオタイプあるいは偏見形成過程として分析するアプローチ(例えば、坂元, 1995)などが知られている。このほか、心理学とは異なる立場からの批判書も多数刊行されているが、本稿では紙数の都合上、必要な論点に関する部分についてだけ3.で引用させていただくこととしたい。

*5 このアイデアは1989年10月の日本応用心理学会第56回大会で発表された。

*6 「ラベリング効果」と「インプリンティング効果」が独立した概念であるかどうかについては議論の余地があると、筆者は考えている。

*4 立命館大学文学部助教授・佐藤達哉氏。http://www.psy.ritsumeit.ac.jp/~satot/newversion/dont/blocul.html

2. 2004年以降の新しい動き

(1) 「血液型」関連番組の急増

以上、2003年までの血液型論議の概略を述べてきたが、2004年になって、民放で顕著な変化が見られるようになった。「血液型」関連番組が次々と放送されるようになったのである。血液型による違いを強調した番組は、TBS系「脳力探検! ホムクル!!」、関西テレビの「発掘! あるある大事典2」、TBS系の「学校へこう!」、テレビ朝日系の「決定! これが日本のベスト」、テレビ東京系「月曜エンタァテイメント」*7、日本テレビ系の「おもいきりテレビ」*8というように、ほとんどすべての民放キー局にわたっている。2004年4月以降に放送された番組の数は50本以上にのぼる*9。

では、じっさい、各番組の中では「血液型と性格」についてどのようなことが語られていたのだろうか。各番組の記録サイト、もしくは筆者が番組録画により聞き取ったメモに基づいて、主な番組5本の特徴を表1に抜き出してみることにしよう。

表1 2004年4月から2005年2月までに放送された主な「血液型」関連番組とその特徴

2004年4月4日放送 関西テレビ 発掘! あるある大事典2 第1回【春の芸能人血液型SP】
<p>【番組記録】 http://www.ktv.co.jp/ARUARU/search2/aruketuekigata_sp/ketuekigata_1.html</p> <p>【特徴】 「研究成果」「実験で実証」を強調。</p> <p>【紹介記事】</p> <p>あなたの血液型は何型?</p> <p>実は近年、世界中の科学者がこの「血液型」に注目し驚きの研究報告が続々と発表されているのです!</p> <p>最新研究報告1</p> <p>「血液型の違いで罹りやすい病気が判る」</p> <p>最新研究報告2</p> <p>「血液型により脳の働き方に違いがある」</p> <p>そして、日本では1930年代から血液型と性格の研究が進みその関連性に着目した書物がベストセラーにもなったのです。</p> <p>血液型人間学研究室 能見俊賢</p> <p>「何十万単位でデータを集めてそのデータによって血液型の特徴と傾向を伝えてきた」</p>

*7 <http://www.tv-tokyo.co.jp/getuenta/>

*8 <http://www.ntv.co.jp/omo-tv/>

*9 『AERA』2005年1月24日記事による。なお、2005年2月10日発行の『週刊文春』には「昨年だけで七十本以上が放送された」と記されている。朝のワイドショーでスポット的に放送される血液型別の「今日の運勢」のたぐいは、この数には含まれない。

統計学に基づいて提唱された「血液型による性格の傾向」相性や人間関係を探る「1つの材料」として今に至っているのです。

2004年6月5日放送 TBS系「脳力探検! ホムクル!!」

【番組記録】 <http://www.tbs.co.jp/program/homuculusp20040605.html>

【特徴】 「実験で実証」を強調。

【紹介記事】

A・B・O・ABの血液型ごとに、脳のタイプの違いがあった!

最近の医学によって「血液型が性格に関わりがある」ことは、もはや否定しようのない事実となった。

そこで、我々ホムクルは、新たなステージへ進む!

最先端の科学者たちが指摘する最新学説、「血液型によって、脳には得意不得意がある」を証明する!!

北海道大学医学部教授が「A型が几帳面、繊細、慎重であるのは、免疫力が弱いから」、「O型が社交的なのは免疫力が強いから」などとコメント。

2004年7月6日ほか放送 TBS系:「学校へ行こう!」

【番組記録の一部】 <http://www.tbs.co.jp/gakkou/>

【特徴】 芸能人の行動特徴から血液型を当てるゲーム「ヴァンパイアカジノ」

「AB型=二重人格っぽいね」、「財布の中身から血液型を当てる」、「中を見ちゃダメといわれたタレントの反応からその血液型を予想する」、失礼なスタッフに対して「そのままやり過ごす傾向」A型か、「返事をしない傾向」のB型か、「間違いを指摘する傾向」のO型か、「最後に訂正する傾向」のAB型か、など。

2004年11月28日放送 TV朝日系:決定!男と女の血液型相性ランキング

【番組記録】 http://www.tv-asahi.co.jp/best/updating_dex/ranking/060.html

【特徴】 このランキングは、「インターネット、街頭インタビューで合計4000人に調査」されたというものであったが、番組サイトに一時的に開設されていたインターネットアンケート質問項目には

Q7. あなたが恋人にしたいと思う異性の血液型は何型ですか?

Q8. あなたが結婚したいと思う異性の血液型は何型ですか?

Q9. あなたが友達にしたいと思う血液型は何型ですか?

Q10. あなたが上司にしたいと思う血液型は何型ですか?

Q11. あなたが部下にしたいと思う血液型は何型ですか?

Q13. あなたが相性がいいと思う血液型は何型ですか? (男女問わず)

といった、血液型差別・偏見を助長しかねない質問項目が多数含まれていた。

2004年12月28日放送 TBS系:ABOAB血液型性格診断のウソ・ホント!本当の自分&相性探し来年こそは関連SP

【番組記録】 http://www.tbs.co.jp/program/ketsuekigatasp_20041228.html

【紹介記事】

一般的にA型=几帳面、B型=マイペース。O型=大らか、AB型=天才肌、とされています。幼稚園児を観察してみると、あれれ、A型はやっぱ几帳面だし、B型はマイペース。O型主婦のタンスの中はちょっと大雑把だし、個性派・AB型中学生のノートは創意工夫がいっぱい…。

ホントに血液型と性格に関連性はないの!?

という疑問に答えて、番組ではある心理テストを実施。ゲスト出演者を含め746人が参加したこのテスト。集計の結果、血液型別に傾向が出たんです【改行箇所を一部改変】

(3)BPOの対応

2004年以降に過熱化した「血液型」番組に対しては、視聴者から、偏見や差別を危惧する声が寄せられるようになり、放送倫理・番組向上機構(BPO)青少年委員会は2004年7月、以下の3本の番組に対して、回答要請を行った。

- 『脳力探検! ホムクル!! ABOAB血液型性格診断のウソ・ホント!』TBS 19:00~20:50 (04/6/5放送分)
- 『決定!これが日本のベスト100!』テレビ朝日 18:56~19:58 (04/6/13放送分)
- 『発掘!あるある大事典2~春の芸能人血液型スペシャル~』関西テレビ 21:00~22:24 (04/4/4放送分)

また、その後2004年12月8日、BPO青少年委員会は、「血液型によって人間の性格が規定されるという見方を助長しないよう」、放送各局へ要望した。その全文は

http://www.bpo.gr.jp/youth/kenkai/blood_1.html

に掲載されている。本稿における議論に必要な要点を抜き出すと以下ようになる。

- ・番組はいずれも、血液型と本人の性格や病気などとの関係があたかも実証済みであるのごとく取り上げている。
- ・【寄せられた】意見の中には、「これまで娯楽番組として見過ごしてきたが、最近の血液型番組はますますエスカレートしており、学校や就職で血液型による差別意識が生じている」と指摘するものもあった。
- ・血液型をめぐるこれらの「考え方や見方」を支える根拠は証明されておらず、本人の意思ではどうしようもない血液型で人を分類、価値づけするような考え方は社会的差別に通じる危険がある。
- ・血液型判断に対し、大人は「遊び」と一笑に付すこともできるが、判断能力に長けていない子どもたちの間では必ずしもそういうわけにはいかない。こうした番組に接した子どもたちが、血液型は性格を規定するという固定観念を持ってしまふおそれがある。
- ・委員会では集中的に「血液型を扱う番組」を取り上げ、いくつかの番組については放送局の見解を求め、公表してきた。その過程で、放送局は「〇〇とされています」「個人差があります」「血液型ですべてが決まるわけではありません」「血液型による偏見や相性の決めつけはやめましょう」など、注意を喚起するテロップを流すようになった。しかし、これは弁解の域を出ず、血液型が個々人の特徴を規定するメッセージとして理解されやすい実態は否定できない。
- ・民放連は、放送基準の「第8章 表現上の配慮」54条で、次のように定めている。

(54) 占い、運勢判断およびこれに類するものは、断定したり、無理に信じさせたりするような取り扱いはない。

これらを踏まえ、青少年委員会としては、「血液型を扱う番組」の現状は、この放送基準に抵触するおそれ

があると判断する。

- ・青少年委員会は、放送各局に対し、自局の番組基準を遵守し、血液型によって人間の性格が規定されるという見方を助長することのないよう要望する。

(4)新聞・雑誌の反応

テレビ局の「行き過ぎ」に対しては、新聞や雑誌でも批判的論調を含む記事が掲載されるようになった。2004年11月から2005年3月までに掲載された主な記事とその論点を表2に示す。

表2 2004年11月から2005年3月までに新聞・雑誌等に掲載された記事の抜粋

2004年11月27日の毎日新聞夕刊(地域により11月28日付日刊) *10
<p>【見出し】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「性格決めつけ」テレビ番組 ・AB型は二重人格 B型はいい加減 根拠ないのに ・血液型判断で「いじめ」視聴者から抗議相次ぐ ・放送倫理番組向上機構 慎重対応要望へ
2005年1月24日発行の『AERA』p.16~19.
<p>【見出し】</p> <p>B型をいじめるな</p> <p>【概略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2004年に放送された番組の問題点 ・決めつけ番組に対する「人権侵害」「いじめ」「青少年への悪影響」などの批判の声の紹介 ・B型への“風評被害” ・血液型を決めるたった1つの遺伝子で性格が決まる、という考えへの批判 ・当たると思われる理由
2005年2月10日発行の『週刊文春』(47巻6号、p.46~48.)
<p>【見出し】</p> <p>「AB型は二重人格」って言うじゃな~い 「血液型占い」どこまで根拠があるの？」</p> <p>【概略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バラエティ番組ではで少数派の「気分屋・B型」と「二重人格・AB型」が揶揄と嘲笑のターゲットにされやすいこと。 ・フィルターをかけて人間を見ることの問題点(菊池氏*11) ・日本における「血液型性格判断の歴史」

*10 本記事には、立命館大の佐藤達哉氏のほか、筆者のコメントが記載されていた。「ほとんどの番組は、いい加減なデータでレッテル張りをしている。血液型という生まれつきのもので他人を判断することは不当だ」と批判している。

*11 信州大学人文学部助教授・菊池聡助氏

- ・筆者のコメント*12
- ・昨今のブームについての能見俊賢氏*13の見解の紹介【→後述】
- ・血液型別保育に対する議論【→後述】。
- ・血液型の科学的根拠に関する能見俊賢氏の見解の紹介【→後述】。
- ・血液型分析を知識として活用することにハラスメント的要素があるという佐藤達哉氏の指摘の紹介。

2005年3月22日発行『女性自身』(第48巻第10号、p.53～55.)

【見出し】

「だからB型は」って言わないで！ 血液型性格判断ブームののなか、いちばんの受難者たちの反論エピソード集！

【概略】

- ・B型タレントのエピソード
- ・BPOの要望紹介
- ・取材に基づくB型者差別のエピソード
- ・佐藤氏や筆者のコメント*14紹介。

3. 批判的思考からみた論点の整理

(1) 偏見・差別の危険性

以上、これまでの「血液型」論議と、2004年以降の新しい動きを概観した。その中で最近目立つようになってきたのが、血液型別の決めつけである。もはや、曖昧でフリーサイズの特徴を列挙して当たっているように見せかけるという時代ではなくなった。

表1にも示したTBS系：「学校へ行こう！」の「ヴァンパイアカジノ」の番組記録サイト*15には、

・【2004年7月20日放送記録より】
そして次の実験が「外でケンカ」！控室の外で番組スタッフがケンカしているのを聞いたときの反応を見る事に！番組の一般調査によるとB型とO型が覗く傾向に。A型とAB型が覗かない傾向に。まずはきんに君、ソワソワと反応はしたが外まで見に行かなかった！そして山本様も自分では見に行かず！そして青木さやか、というとテ

*12 血液型性格判断に科学的根拠があると仮定しても、他人を評価する手段に安易に用いるべきではありません。特に、個人間の行動の差異を何でもかんでも血液型に結び付けて解釈しようとする『血液型こだわり主義』は批判するべき。

*13 NPO法人 血液型人間科学研究センター(2004年9月10日設立)。http://www.abo-world.co.jp/
能見俊賢氏は能見正比古氏の子息。

*14 異なる血液型間でお互いをけなすような事態は不幸なことです。

...

健康やダイエットのために血液型別の指南書を活用する程度なら、それほど深刻になる必要はないでしょう。でも、性格判断や人物評価となると話は別。性別や人種で人を判断することと同じような不当性があります。偏見や差別が生まれないうえにも、血液型別の決めつけはなくしていくべきです。

*15 http://www.tbs.co.jp/gakkou/

レビを消して、トイレと偽って見に行くという野次馬根性を発揮！

迷う森田・脇チームは青木を「二重人格っほいね」と「O型からAB型」へ、坂本・三宅チームはきんに君をA型、山本をO型に入れ替えた！

・【2004年8月24日放送記録より】

まずは蛭原と川村の財布、A型と予想されていた蛭原の財布は中身はバラバラ、小銭いれを持ち、しかもカード系が多いというAB型の特徴が出ており、かえって混乱することに！

続いては三津谷と村上の財布、三津谷は千円札が多いというまさにO型の特徴！そして村上はお札が丁寧に収納されているというA型の特徴が出ていた！

・【2004年9月7日放送記録より】

1stステージの実験は「スイカの食べ方」！それぞれのサンプル芸能人のスイカの食べ方から、何型かを予想する！そこでスタッフが血液型別に検証し分類したところ「A型=種もまとめて見てもキレイに食べる」「B型=食べ残しが多く、種もバラバラ」「O型=キレイに食べてはいるものの赤身が多い」「AB型=食べることに夢中になるためか、種を飲み込んでしまっている」という結果に。

・【2004年11月2日放送記録より】

続いての実験は前回大好評の「失礼なスタッフ」！収録の打合せで、タレントが自分の名前をスタッフに間違えてられた場合、どのような反応をするのか！という実験。「そのままやり過ごす傾向」A型か、「返事をしない傾向」のB型か、「間違いを指摘する傾向」のO型か、「最後に訂正する傾向」のAB型か！

というように、血液型によって行動傾向に明確な違いがあるかのような決めつけがなされ、それを手がかりにタレントの血液型を当てっこするといゲームが行われていた*16。

2004年10月3日に放送された「発掘！あるある大事典2 秋の芸能人血液型スペシャル」では、大規模な血液型相性調査が行われたという。その際の質問は「アナタと相性の良い異性の血液型は？」そして「アナタと相性の悪い異性の血液型は？」であった。2004年11月28日放送のTV朝日系「決定！男と女の血液型相性ランキング」でも、事前にネット上でアンケートが行われていたが、その質問項目の中には、

Q9. あなたが友達にしたいと思う血液型は何型ですか？

Q10. あなたが上司にしたいと思う血液型は何型ですか？

Q11. あなたが部下にしたいと思う血液型は何型ですか？

というような、血液型者の好悪を問う設問が含まれていた。

血液型が生まれながらに備わっている以上、これらの設問は、生まれつきの属性(性別や人種など)と結びつけて他人を判断してしまうことの不当性、例えば「あなたが部下にしたいと思う人種は何人種ですか？」と訊くことと同一であり、重大な人権侵害を引き起こす恐れがある。

*16 「ヴァンパイアカジノ」は、ここに挙げた放送日以外にも放送されている。

BPOの回答要請先の1つ、2004年6月5日放送のTBS系：『脳力探検! ホムクル!! ABOAB 血液型性格診断のウソ・ホント!』に関して、TBS側の回答^{*17}の中には

その後放送されたTBSのレギュラー番組「脳力探検クイズ! ホムクル」の血液型コーナーでは、差別に繋がりがねない表現をカットするとともに、どの血液型についてもその長所を強調するかたちで扱いました。更に「個人差があります」というスーパーテロップを出来るだけ多く挿入しました。これらの番組については、現在まで差別的に扱われたというご意見は殆ど頂いておりません。

と記された部分がある。しかし「どの血液型についてもその長所を強調するかたち」というのは、集合論的には、それ以外の血液型ではそういう長所が無いと言っているだけのことであり、差別を解消したことにはならない。性格の特徴は普通、平均より高いか低いかという形で相対的に表現されるものだ。それゆえ「X型にはYという長所がある」と表現することは、論理的には「X型以外ではYの傾向が平均より低い」と言っていることと同じ意味になる。「個人差があります」というアリの警告も同様。個人差が著しくあるのなら、「傾向」すら語れないはずだ。

テレビ番組以外で憂慮すべき出来事として、血液型別保育を挙げることができる。NPO法人血液型人間科学研究センターの「血液型 子育て倶楽部」Webサイト^{*18}には血液型別の子どものしつけやポイントや母親の血液型別の心構えなどが紹介されている。表2に掲げた2004年2月10日発行の週刊文春記事の中で、同センター理事長の能見俊賢氏は、

血液型別の性格行動がもっとも顕著に現れるのは、外的操作要因の少ない子供とスポーツにおいて。特に幼児は自己演出ができないため、生まれ持った材質の特性が鮮やかに出やすいんです。几帳面に後片付けをするのはA型の園児など、特性は顕著に見られる。

と、血液型別保育の意義を強調している。

また、琉球新報2004年8月6日記事^{*19}によれば、2004年8月3日～4日に、私立幼稚園連合会九州地区会の第20回教師研修大会沖縄大会が那覇市のパシフィックホテル沖縄であり、九州各県から約千人が参加した。その中で文部科学省幼児教育課の蒲原基道課長の基調講演のほか、教育評論家・阿部進氏が、自身がかかわる保育園で20年前から血液型を保育に活用、効果を挙げていることを具体的事例を基に説明する内容の講演を行ったという。文部科学省幼児教育課長が基調講演を行う会合であったこと、多くの幼稚園教師が参加したことを考えると、幼児教育者への影響は計り知れない。

*17 http://www.bpo.gr.jp/youth/answer/answer_42.html

*18 <http://www.abo-world.co.jp/contents/>

*19 Yahoo!沖縄ニュース 2004年8月6日(金)10時53分 琉球新報発信による。

かつて「あるある大事典」^{*20}で紹介されたところによれば、埼玉県行田市・大井保育園では週に2回、血液型別にクラス分けをしたユニークな縦割保育を行っているという。また、このほか、ネット上で検索可能な別の保育園の保育日誌の中にも例えば

今日は1・2才児でグループ別保育をしました。血液型で4グループに分かれ、シール貼りをしました。AB型のNくんは2才児のお兄さん・お姉さんの顔を不思議そうに見つめていましたが、シール貼りが始まると夢中になっていましたよ。マイペースな雰囲気を持つ、AB型のグループでした。B型・O型グループはケンカもなく、集中して遊んでいました。一方A型は思ったより自由奔放な雰囲気でした。

といった記述があり^{*21}、保育の世界における影響の大きさが危惧される。前掲の『週刊文春』記事における「組織的に『予言の自己成就』を引き起こしており、血液型という四種類の枠に当てはめて、子供の豊かな可能性を奪っている」という中西氏^{*22}の指摘はもっともであると言える。

なお、特定の血液型者へのネガティブな偏見は必ずしも、少数派のB型者とAB型者へ向けられたものばかりではない。戦前の「血液型ブーム」は、血液型提唱者がそれを意図したかどうかにかかわらず、当時の政治的背景のもとで注目を浴びていた。大村(1998)によれば、1931年発行の『実業之日本』には

台湾原住民の反抗が激しい(当時台湾は日本の植民地だったので)。原住民にO者が多いからである。O型者は、がんらい、一般にきかぬ気で、しかも旺盛な精神力を持っている。そこでA型者の多い内地人(日本本土の住民)との結婚を奨励して、遺伝的に彼らのなかにA型者を増加すれば、血縁につながる人情の美しさもあって、彼らはだんだん温和従順になってくるであろう。

というような説まで飛び出している(古川, 1931^{*23})

このほかA型者に対しても「神経質だ」、「独裁的だ」といったステレオタイプな表現が見られるほか、2005年3月時点で被告となっているカルト宗教の教祖やヒトラーなどA型者の悪者ばかりを並べてA型者を攻撃する人もいるという。こうした偏見は、テレビ番組経由ではなく、むしろ、匿名掲示板の書き込みに多く、そのことで気分を害しているA型者も多いと言われている。

*20 <http://www.ktv.co.jp/ARUARU/search/arublood/blood4.htm#oui>

*21 http://www6.ocn.ne.jp/~nobori/nobori_news/news161018.htm.htm 宇治市「登り保育園」の2004年10月20日保育園日記による。但し、当該保育園のサイトには、組織的に血液型別保育を実施しているとの記述は見あたらない。

*22 広島修道大学人文学部助教授・中西大輔氏

*23 大村(1998)、103頁からの間接引用。大村(1998)の第4章～第5章には、戦前の古川学説とそれを支えた人々についての詳しい紹介がある。

(2)なぜ批判的思考の視点が必要なのか

「放送倫理・番組向上機構 (BPO)」が12月8日に「血液型によって人間の性格が規定されるという見方を助長しないよう」放送各局へ要望した後も、

●2004年12月19日放送：TV朝日系「決定！これが日本のベスト100・芸能人100人！血液型大実験SP」

●2004年12月28日放送：TBS系「ABOAB血液型性格診断のウソ・ホント！本当の自分&相性探し来年は開運スペシャル」

●2005年2月14日放送：テレビ東京系 月曜エンタァテイメント「血液型スペシャル2」

というように、いくつかの「血液型」特集番組が放送された。但し、これらは、要望表明時点ですでに制作に取りかかっており、放送中止措置の損害を斟酌した上で、駆け込み的に放送された可能性もある。筆者が把握している限りでは、2005年3月～4月期には、血液型を大々的に扱ったスペシャル番組は放送されていない。

放送各局が、BPOの要望に従って「血液型」番組を自粛すれば、今回の「ブーム」はひとまず区切りをつけることになる。また、「生まれつきの属性（性別、血液型、人種など）と結びつけて他人を判断してしまうことの不当性」という人権意識が定着すれば、他者の評価目的に血液型ステレオタイプが持ち出されることも減っていくものと思われる。

しかし、単に「血液型」は偏見・差別だから止めよう、というだけでは問題は解消しない。差別・偏見の危険性を訴えただけでは、「血液型ステレオタイプ (=テレビ番組などの一方的な情報によって固定観念を受け付けられてしまうこと)」に陥っている人たちを心の底から納得させることはできない。「血液型」に関する学問研究の自由を妨害していると反発される恐れもある。

ここで留意しなければならないのは、「血液型性格判断」は、必ずしも、学術研究で実証されたという理由で信じられているのではないという点である。個人体験や主観だけに基づいて「当たっている」と判断し、その「信念」に一致する事例だけを肯定的に受け入れようとする。時たま、脳生理学者などが肯定的にコメントすれば「やっぱり正しかったのだ」と得心する。その一方、血液型による差は無かった（もしくは「それほど顕著ではない」というような報告を耳にしても、「今回は血液型の影響は検出できないほど微小であった。外に現れない程度であっても何かしら影響を及ぼしている」として、固定観念を改めようとしな。こういう態度を持ち続ける人々に対しては、純粋な学術論争ではなく、まずは、批判的思考(クリティカルシンキング)^{*24}への理解を求めながら、多面的な見方を促すという方策が必要となってくる。本稿の残りの部分では、「血液型」をめぐる批判的思考適用の事例を取り上げていくことにしたい。

(3)血液型性格判断 3つのレベル

筆者は、自らが開設しているWebサイト「血液型性格判断資料集」^{*25}において、「血液型」論議は、

レベル1：統計的には有意であるが実用的には役に立たない程度の僅かな差が見られるのかどうか、という学術レベルの議論

レベル2：実用的価値があるほどの顕著な差が見られるのかどうか、という日常生活への応用可能性についての議論

レベル3：生まれつきの属性（性別、血液型、人種など）と結びつけて他人を判断してしまうことの不当性はないか、という人権に関する根本的議論

という3つのレベルのそれぞれにおいて議論すべきであると主張している。

このうち、レベル3の危険性については、すでに3(1)に記した通りである。かつて優生学がナチズムや人種差別などに利用されたように、また現に、戦前において血液型者の優劣や犯罪傾向などが調査された(大村, 1998) ことから示唆されるように、偏見・差別を助長しないように十分な配慮が求められる。

しかし、すでに述べたように、差別につながるから止めましょう、と自粛を呼びかけるだけでは、レベル2やレベル1の信奉者の固定観念を変えることはできない。批判的思考という視点からの地道な働きかけがどうしても必要である。

次に、「血液型」論議がしばしばすれ違いに終わるのは、レベル1とレベル2の取り違い、もしくは意図的な論点のすり替えに起因していることが多いように思う。

例えば「心理学者は血液型と性格の関連を否定している」などとよく言われるが、これは、レベル2における否定論であって、レベル1の「僅かな差の可能性」を頭ごなしに否定しているわけではない^{*26}。

「血液型と性格は関係があるかもしれないが、人間の行動はそれだけで決まるものではない。他の多種多様な要因が複雑に働いている以上、血液型だけでタイプ分けするのは間違っている」

*24 批判的思考についての定まった定義はないが、いっばんに

(1)物事を一面的ではなく、多面的に見たり考えたりすることができる、(2)問題を解決するのに、いろいろなやり方を考え、試そうとする、(3)自分の考えに固執せず、論理的な正しさや客観性を重視する、といった特徴をもつ思考・判断のことを言う。ゼックミスタ・ジョンソン (1996) ほか参照。

なお、2004年2月8日に、京都大学百周年時計台記念館で「批判的思考の認知的基盤と実践ワークショップ」が開催され、批判的思考の定義や、大学教育への導入をめぐる様々な問題について議論された。長谷川の参加報告が http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/journal/psy-rec/_40208/index.html にある。

*25 http://www.geocities.jp/hasep_diary/bloodtype/index.html

と主張する場合も同様である。この場合も、レベル1における「僅かな差」については肯定も否定もしていない。レベル2における否定論を展開しているのである。

これに対して「血液型肯定論」の人たちのなかには、レベル1に関する免疫学やら脳やらの「研究」のうち肯定論に都合のよいデータだけを引用して、「否定論」は間違っていると主張する人がいる。ところが、レベル1でいかにも厳密な科学的態度をとっているように見える肯定論者が、レベル2になるとたちまち「批判的態度」を失い思考停止に陥る。明らかにヤラセとわかるような「実験」であっても、血液型による違いに肯定的な結果が得られている限りは「また1つ、肯定論の証拠が増えた」といって無批判に受け入れているのである。

(4) 全称判断に対する批判的思考

「血液型」論議は、しばしば、

● 「血液型と性格には相関(関係)があるかないか」

といった二者択一型の議論(=いわゆる「全称判断」)にすり替えられることがある。

よく言われるように、「すべての人は死ぬ」というような全称判断は、死という事例の集積だけでは肯定も否定もできない。明治元年以前に生まれた人がすべて亡くなっているのは事実であるが、いま生きている人がすべて死ぬかどうかは現時点では確認できない。まして何百年後に生まれる人のことまでは調べようが無い。これと同じ論理で、「血液型と性格は全く関係無い」などということは、いくら事実を積み重ねても否定できるものではない。

では、その一方、ある学者が「血液型と性格は関係がある」という確かな証拠を一事例示したら、これまでに提唱された「血液型性格判断」はすべて根拠があったことになるのか。

要するに、この種の論議は、問題設定自体が誤っているのである。長谷川(1994)は「血液型と性格」について取りうる、真の科学的態度について次のように主張している。

ここで強調しておくが、血液型人間「学」がある種の普遍性を主張する「理論」であるのに対して、「血液型と性格は関係がない」というのは理論ではない。研究の出発点となる作業仮説にすぎない

*26 長谷川(1994)はこのことに関連して

以上、確率現象の錯覚や統計学誤用という観点から、血液型人間「学」のからくりを考えてきたわけであるが、これらを指摘したからといって「血液型と性格はまったく関係がない」ということにはならない。筆者は、約一〇年前よりこの問題をとりあげてきたが(7)(8)、その主旨は、第一に、血液型人間「学」と呼ばれる俗説のデタラメな「分析」方法を批判すること、第二に、「血液型と性格」には少なくとも日常生活場面で問題になるほどの相関はないことを反例の形で示すことにあった。純粋に科学的なレベルで「血液型と性格がまったく関係ない」かどうかは私にはわからないし、この問題についての科学研究を妨げるつもりもない。

と断り書きをしている。

いのである。理論は一つの反例によって崩すことができるが、作業仮説に反例を示したってしょうがない。「血液型と性格は関係がない」という作業仮説のもとに地道にデータを集め、ある性格的特徴について明らかに血液型との関係を示すようなデータが安定的に得られた時に初めてこの仮説を棄却するのである。これこそが、雑多な変動現象の中から帰納的に規則性を見い出そうとするときにとるべき科学的態度である。

(5) 応用可能性についての批判的思考

調査データの平均値や比率を比較する時には、見た目の主観的印象ではなく、統計学的な有意差検定にかけた上で、客観的根拠に基づく結論を導く必要がある。経験科学においてこのことはきわめて大切であるが、有意差という概念を取り違え、「5%水準で有意差があった」という一例だけで、決定的かつ顕著な差違があったかのように誇大解釈してしまうとんでもないことになる。

統計的検定で得られる p 値についてはまず、橋(1986)が指摘した以下の点に留意する必要がある(p.63~73ほか、長谷川、1999を併せて参照)。

- ・ p や $1-p$ は対立仮説の正誤を示す確率ではない。
- ・ p や $1-p$ は帰無仮説の正誤を示す確率ではない。
- ・ p 値は結果の再現性を反映しているわけではない。
- ・ p は、もし帰無仮説が正しいとすると得られた標本の差が生じる確率は p 以下であるという意味である。
- ・ p は、帰無仮説が真のもとでの“観測値の出現率”を計算しているにすぎない。

このほか、相関係数が有意であると $r=1.00$ であるかのように解釈されてしまう誤用例も橋(1986, p.101)によって指摘されている。

新聞やテレビで「統計的に有意であった」と紹介される調査・実験結果は、概ね、以下の3つのタイプに分けることができる。

- (a) 2つのグループの平均値の差が有意であった。
- (b) 比率の偏りが有意であった。
- (c) 相関係数が有意であった。

大ざっぱな表現になるが*27、(a)から(c)における「有意」とは、それぞれ、「平均値が等しい」、「もともとの比率どおり」、「相関はゼロ」という仮説が真実であったとして実際にそこからサン

*27 厳密には、片側検定か両側検定か、あるいは検定力の問題にもふれておく必要がある。

ブルを集めた場合、観測された程度またはそれ以上の差や偏りが起こりうる確率は5%未満(あるいは1%未満)であるということの意味しているにすぎない。

「有意差」は、調査対象における、緊急性、重大性、操作可能性、コストなどを勘案しながら、実際には差がないのに差があると検定してしまうリスク(Type I error)と、実際には差があるのに差がないと検定してしまうリスク(Type II error)を天秤にかけて、適切に対処していくほかはない。

例えば2004年6月5日放送のTBS系「脳力探検! ホムクルII」では、北海道大学の医学部教授が

- A型が几帳面、繊細、慎重であるのは、免疫力が弱いから
- O型が社交的なのは免疫力が強いから

などと「解説」をしていたが、A型とO型の免疫力のあいだに有意な差があるというばかりでなく、その差が顕著であり予防医学上問題になるほどであるとするなら、行動傾向への因果的説明を試みる以前に、まずは医療現場での応用を考えることのほうが先決である。例えば、インフルエンザワクチンが不足していた場合にはA型から優先的に予防注射を実施するという方策を検討する必要がある。

「X型はYという傾向がある」というデータが真であったとしても、「Yという傾向が観察されたから、あの人の血液型はX型である」という予測に結びつくとは限らない。これはベイズの公式を理解していないことによる誤りである。特に日本人における絶対的比率が1割に満たないAB型者を当てるなどということは、AB型者に「他の血液型では絶対に見られないという行動特性」でも発見されない限りは殆ど不可能である。仮にAB型でYという傾向がある確率が80%、それ以外の血液型でYという傾向がある確率が20%であったとする。また便宜上、日本人のAB型の比率は10%として計算する。ベイズの公式にあてはめると、分子は $0.8 \times 0.1 = 0.08$ 、分母は、 $0.8 \times 0.1 + 0.2 \times 0.9 = 0.26$ となり、Yという傾向が観察された人がAB型である確率は $0.08 / 0.26 = 0.31$ となる。これでは「あなたはAB型でしょう」と言っても7割は外れてしまう。

わずかな差を示したとされるデータが実用上何の役にも立たない事例として、ABO WORLDの「交通事故と血液型」というデータ^{*28}を挙げるができる。それによれば、

今回の調査で有効回答サンプルとなった1,374名の血液型をみると以下のように、O型(35.6%)、A型(34.3%)、B型(19.6%)、AB型(10.5%)という構成【に】なった。これを日本人の平均的な血液型分布と比較してみると、

*28 <http://www.abo-world.co.jp/databank/index.html#traffic>

O型は日本人の平均的な血液型分布よりもやや多く、A型はやや少なく、B型、AB型はほぼ同じ、であることがわかる。

しかし、この程度の差から交通事故防止のためにどれだけ有用な情報が引き出せるであろうか。少なくともレベル2において、O型者が加害事故を起こしやすいとは到底言えない。妥当な結論はあくまで「どの血液型でも事故を起こす危険がある」ということである。わずかの差(←偶然の変動の範囲なのか有意な差なのかも疑問)を誇大に解釈してO型は「歩行者に対する人身事故」、A型は「単独事故」、B型は「交差点における出合頭事故」、AB型は「追突事故」が各血液型の特徴などとタイプ分けすることにどれだけ意味があるのか、はなはだ疑問である。応用可能性という点からは、血液型が何であれ、種々のタイプの交通事故に注意しましょう、と呼びかけるべきである。

(6)ちょっとした批判的思考を働かす

以上に述べた以外にも、ちょっとした批判的思考を働かすことで、テレビ番組で扱われる内容の問題点や、別の解釈の可能性を指摘することができるようになる。以下、紙数の都合で4件だけ事例を挙げておくことにする。

(a)蚊にさされやすい血液型

2004年9月5日放送のTV朝日系の「決定!これが日本のベスト」^{*29}の中で「蚊に刺されやすい血液型」としてO型が挙げられていた。また別の番組では「O型の糖鎖は、花の蜜の糖分と良く似た分子構造をしており、花の蜜と同じく甘いと感じるのでO型を好む」と説明されたこともあった。しかし、ちょっと考えてみれば分かるように、蚊にとって、被吸血者の血液型が判明するのは、皮膚に到達して血を吸ったあとのことである。皮膚から離れた位置で対象者の血液型を検知し、それによって吸い付くかどうかを選択するという事はあり得ない^{*30}。

(b)幼稚園「実験」の問題点

いくつかの番組では、幼稚園児に血液型別に色を変えた帽子やエプロンをつけさせ、血液型別にグループに分けた上で別々のテーブルにつかせ、スイカを食べさせたり、料理を作らせたりす

*29 http://www.tv-asahi.co.jp/best/updates_dex/ranking/052.html

*30 このことに関しては害虫防除技術研究所が詳細な解説を行っており、「血液型物質は揮発性物質の糖鎖であることから、皮膚に降着する前に感知はできないと思われる」といった見解を紹介している。

<http://www.gaityu.jp/syosaibloodtype.html>

なお当該サイトには

また、血液型による刺されやすさの実験をして、必ずダントツにO型が刺されやすくなることはありません。テレビ番組はあらかじめ、コンセプト、ストーリー、結論まで決めてから制作していることが多いのを実感しました。取材を受けても、研究者の意図が十分に反映されずに制作されることが多いことを知っていただきたく思います。制作会社が強引に結果に結びつけることも多いと考えます。

というコメントも付記されている。

る「実験」を行った。^{*31}

しかし、血液型別に違う色の帽子やエプロンをつけさせるというのは、運動会で言えば、赤組、白組、青組、というようにグループ分けして競わせるようなものである。当然、それぞれのグループ独自の特徴が出やすくなる。出てきた特徴の中から自説に一致する結果だけを抜き出せば、いくらでも後付けで都合の良い解釈ができるものだ。

同じテーブルで園児たちにスイカを食べさせた場合も、サンプルの独立性という点で問題が生じる。グループ内の一人が種を撒き散らせば他の子どもたちもその真似をする。逆に、リーダー格の子が行儀良く食べれば他の子どももその影響を受ける。もちろん中には、個々バラバラの振る舞いを見せるグループもあるだろうが、グループ内の一人一人はもはや独立したデータではないという点に留意する必要がある。

(c)相性アンケートのトリック

3(1)でも言及したように、2004年10月3日に放送された「発掘！あるある大事典2 秋の芸能人血液型スペシャル」では、大規模な血液型相性調査が行われたという。番組記録サイト^{*32}によれば、この調査は各血液型者男女各1000人、計8000人にQ1「相性の良い異性の血液型は？」、Q2「相性の悪い異性の血液型は」という質問を行い、「相性が合う」回答数と「合わない」という回答数の差をランキングに使ったという。しかし、この時点ですでに以下のような疑問が湧いてくる。

まず、この質問に答えるためには、回答者は身の回りのすべての人の血液型を知っていなければならない。いくら「血液型」好きの日本人といえども、8000人全員にそのような知識があるとは信じがたい。となると、回答者はおそらく、自分の身の回りの人たちとの相性を周到に分析したのではなく、「血液型ステレオタイプ」に基づく「性格類型」、つまり、実際の血液型者ではなく、ステレオタイプに植え付けられた「血液性格型」への相性について答えている可能性が高い。各1000人ずつというが、これは必ずしも適正なサンプリングとは言えない。各血液型者の比率はおおむね、4:3:2:1になっているからだ。

いま述べた比率は、我々自身の血液型の比率であるとともに我々が接する血液型者の比率にもあてはまる。つまり、日本人は普通、約4割を占めるA型者と多く接する。AB型者の知り合いはそんなに多くない。仮に相手の血液型をすべて知っている人が回答した場合でも、判断資料には偏りが生じる。つまり、身の回りの10人を思い浮かべ自己体験に基づいて相性の良し悪しを回答した場合、A型者はおおむね4人であるのに対して、AB型者は1人だけについての「合う、合わ

*31 2004年12月8日のBPO要望では

番組内で血液型実験と称して、児童が被験者として駆り出されるケースが多く、この種の“実験”には人道的に問題があると考えざるを得ない。

実験内で、子どもたちは、ある血液型の保有者の一人として出演、顔もはっきり映し出され、見せ物にされるような作り方になっている。中には子どもたちをだますような実験も含まれており、社会的にみて好ましいとは考えられない。

という問題点も指摘されている。

*32 http://www.ktv.co.jp/ARUARU/search2/aru26/26_1.html

ない」で答えざるを得ないことになる。A型者に対する全体的な印象は「平均的」とならざるを得ず、一方AB型者への印象は、たまたま知っている人の個性を反映しやすくなる。

(d)両親・きょうだいより血液型？

2005年2月3日放送の日本テレビ系「おもいきりテレビ：血液型別・血中脂肪を減らす魚肉野菜の選び方」^{*33}では血液型別魚肉野菜の選び方を取りあげていたが、その途中で「血液型の誕生」という話題が挿入された。それによれば、

紀元前5万年頃にアフリカでO型人類が誕生。そこから紀元前4万年～1万年頃にA型ができて、さらに紀元前1万年～3500年頃にヒマラヤ付近でB型、最後に紀元前900年～西暦900年頃にAB型が誕生した。O型はアフリカで生まれたから狩猟民族、A型は農耕民族…。

この日の番組の話題や前後の文脈から判断して、要するに、O型人間とA型人間は、その起源や自然環境への適応の仕方が異なるので体質も異なる、だから、オススメの食べ物も違ってくるのだということを言いたかったようだ。

しかし、仮に血液型誕生の起源がお説の通りであったとしても、血液型最優先で体質が決まると考えるのは明らかな飛躍である。例えば、O型の父と、A型(但しAO型)の母をもつ、2人兄弟が居たとする。兄はO型、弟はA型であったとしよう。また隣の家には、アフリカからやってきた家族が住んでおり、そこにもO型の兄とA型の弟が居たとしよう。

もし血液型が第一義的に消化の特性や食習慣まで影響を及ぼすというのであれば、人種や両親の違いにかかわらず、O型はO型、A型はA型だけで体質が決まってしまうことになる。そんなことより、まずは

●体質は、親子やきょうだい間で最も一致しやすい。

と考えるべきであろう。同じ親から、ご先祖が狩猟民族の子と農耕民族の子が生まれてくるとも言うのか。とんでもないことである。

4. おわりに

本稿は、批判的思考(クリティカルシンキング)の観点から「血液型性格判断」の論点を捉え直し、多様な視点から人間行動を理解するための資料として活用することを目的とした。

長谷川(1985, 1988, 1994)で述べているように、筆者は、

●統計的には有意であるが実用的には役に立たない程度の僅かな差が見られるのかどうか

*33 <http://www.ntv.co.jp/omo-tv/01/0203/main.html>

という、レベル1の学術研究に関わる議論については何ら否定的立場に立つものではない。

但しテレビ番組を中心とした昨年来の「ブーム」の中にあっては、レベル1のに取り組む研究者は

レベル3:生まれつきの属性(性別、血液型、人種など)と結びつけて他人を判断してしまうことの不当性はないか、という人権に関する根本的議論

を念頭において地道にデータを積み重ね、その成果が娯楽目的、商用目的に悪用されぬよう、また新たな偏見・差別をもたらすことがないよう、社会的責任を十分に自覚して研究を進める必要がある。

ところで、「NPO法人 血液型人間科学研究センター」の能見俊賢氏は2005年2月10日発行の『週刊文春』の取材に対して以下のような考えを表明しておられる^{*34}。批判的思考という視点から「血液型」論議をとらえる上で重要なポイントを含んでいると思われるので、最後に、これらに対するコメントを述べさせていただくことにしたい。

(1)人の性格は、千人いれば千通り。四分類できるなど、少なくとも私は一度も言及したことはありません。また、人と人の相性は努力次第で、絶対的相性も存在しません。一部でセンセーショナルに性格を決め付けたり、相性の良し悪しを騒ぎ立てる傾向があるのには胸が痛みます。

それでもこれだけ短期間に広く社会に浸透したのは、実用的で有効であればこそです。血液型性格分析が既にブームを通り越し、社会に定着していることが、その実質性を物語っているのでは

(2)どんな学問も、最初はわからないことだらけ。丹念に事例を集め、仮説を投げかけ、それを裏付ける……の繰り返しが基本です。ガリレオが地動説を唱えた時、著しい迫害にあったように、既存の権威が貴重な新しい研究分野について足を引っ張るべきではない。

(3)対抗できるだけの反論データや客観的な観察の積み重ねもないままに、「関係のあるなし」を論ずるべきではないでしょう。

(4)血液型の存在が分かったのは、わずか百年ほど前。分析も始まったばかりで、まだまだ未知数です。僅かな年月で急成長した分野だけに、弊害や偏見が生じてしまうのは仕方ないでしょうが。

まず(1)であるが、純粋に学術研究、つまり上述のレベル1の形で研究が行われる限りにおいては、人の性格や相性を4分類で済ますなどという方向に向かうはずがないことは当然のことである。なんでもかんでも「血液型と関係があるかないか」に結びつけてしまうというのでは、そもそも科学的態度とは言えない。しかし、血液型をひとたび日常生活に役立つツールとして利用し

ようともくろめば、「X型にはYという特徴が多い」というように何らかの傾向に言及せざるをえない。「これだけ短期間に広く社会に浸透したのは、実用的で有効であればこそです。血液型性格分析が既にブームを通り越し、社会に定着している」というのは、まさにその決めつけが行われているという意味に他ならない。いくらテレビ局が「個人差があります」「例外もあります」というように但し書きをつけたとしても、傾向に言及する以上は、そこから逃れることはできない。

次に「(4)血液型の存在が分かったのは、わずか百年ほど前。分析も始まったばかりで、まだまだ未知数です。僅かな年月で急成長した分野だけに、…」という部分についてであるが、学術研究における100年の年月は決して「始まったばかり」とは言い難い。気質や行動傾向を分析するツールは、心理学関連分野の中で十分に確立している。行動分析学の創始者のスキナーが『*The behavior of organisms: An experimental analysis.*』という書物を著したのは1938年であり、古川竹二の『血液型と気質』が刊行された1932年よりも後のことであるが、行動分析学のほうが今では国際的な学会組織に成長した一方、「血液型」のほうはいつまで経っても「まだ始まったばかり」から抜け出せない。

では、「血液型」研究には何が欠けているのであろうか。一番の理由は、「科学」を標榜しながらも、それが、反証可能な形で理論として提示されていないことにある。反証できる形で主張されていなければ、もとより「対抗できるだけの反論データや客観的な観察の積み重ね」などを揃えることはできないのである。結局のところ、「血液型の存在が分かったのは、わずか50年ほど前」、「血液型の存在が分かったのは、わずか100年ほど前」、「血液型の存在が分かったのは、わずか150年ほど前」…というように、何年経っても、「まだまだ未知数です。僅かな年月で急成長した分野だけに…」と弁明を続けていく宿命にある。

最後に「どんな学問も、最初はわからないことだらけ。丹念に事例を集め、仮説を投げかけ、それを裏付ける……の繰り返しが基本です」というのはまさにその通りである。いや、本当にそう思っておられるならその通りにやっていただきたいのだ。商業主義や娯楽と切り離し、偏見や差別を排除した形で、純粋な学術研究として「血液型性格判断」が発展していくことを願ってやまない。

引用文献

- 長谷川芳典(1985)。「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する。日本教育心理学会第27回総会発表論文集。[東京都千代田区・国立教育会館]
- 長谷川芳典(1988)。血液型と性格——公開講座受講生が収集したデータに基づく俗説の検討。長崎大学医療技術短期大学部紀要, 1, 77-89.
- 長谷川芳典(1994)。目分量統計の心理と血液型人間「学」。詫摩武俊・佐藤達哉(編)現代のエスプリ324『血液型と性格 その史的展開と現在の問題点』, pp. 121-129.
- 長谷川芳典(1999)。心理学研究法再考(1)基礎的統計解析の誤用をなくすための30のチェック項目。岡山大学文学部紀要, 21, 47-59.
- 能見正比古(1971)。血液型でわかる相性。青春出版社。
- 能見正比古(1977)。血液型エッセンス。性格と人間関係の実用百科。サンケイ出版。
- 大村政男(1990)。血液型と性格。福村出版。

*34 長谷川による抜粋、言及箇所を明確にするため箇条書き化した。

大村政男 (1998). *血液型と性格 新訂版*. 福村出版.

坂元章 (1995). 血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用 ——女子大学生に対する2つの実験——. *実験社会心理学研究*, 35, 35-48.

佐藤達哉・渡邊芳之 (1992). 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究. *心理学評論*, 35, 2, 234-268.

佐藤達哉・渡邊芳之 (1996). *オール・ザット・血液型～血液型カルチャー・スクラップ・ブック*. 株式会社コスモの本.

橘敏明 (1986). *医学・教育学・心理学にみられる統計的検定の誤用と弊害*. 医療図書出版

ゼックミスタ・ジョンソン著、宮元・道田・谷口・菊池訳 (1996). *クリティカルシンキング入門編*. 北大路書房.

Journal of the Faculty of Letters

Okayama University

Vol.43

July 2005

Blood-type Controversy as an Educational Material for Critical Thinking

Yoshinori HASEGAWA